

礼拝

令和3年6月14日
3号



本校で学んでほしいこと

～校訓を社会で生かす～

六月も折り返しの日を迎えました。先週からは個人面談が始まり、中間考査までの振り返りや、期末に向けての取り組み、あるいは進路に関する相談が進んでいることと想います。何事も最初が肝心です。後悔しない一学期にするためにもしっかりと話をしてください。

さて、皆さんは躰系（しつけいと）というものを知っているでしょうか。躰系は折目正しい服をつくるためにつけられるものですが、いざその服を着るときにはとり除いてしまします。それが躰系の役目なのです。もしもその服を着るときに「躰系を取り忘れていきます」

といった具合に躰系がついたままでは、格好の悪いものになってしまいます。

学校での学びも、躰系に似た性格があります。それは、学校を卒業して社会へ出て、他の人々と共に社会生活を営むようになつたとき、「私はこんなにも勉強をしてきた人です」とか、「こんなにも教養があります」と言わんばかりの態度が出てしまつては、せっかくのあなたの学びや身につけた教養の価値を下げしてしまうこととなります。受けてきた教育や身につけた教養が、その人の生活の中に溶け込んでいて、何かのはずみで自然とにじみ出てくるようであればなりません。言動の一つ一つの中に、それとなく現れてくる知識や教養であつてこそ、真に学校で教育を受けたと胸を張つて誇りに思うことができるのです。

このような意味で、学校の教育はまるで躰系のような役目をなすのです。つまり、学校での教育や学びは、社会に出てから間違いなく「礼儀正しい秩序のある平和な生活ができるように」行われるものであり、学校生活を送っているときには、多少窮屈（ききゅうくつ）であっても、身につけようとするべきものなのです。しかし、それが卒業してからも、先生に直接指導を受けなければならぬような状況であつたならば、本心に恥ずかしいことなのです。むしろ卒業後は、自然に内

部からにじみ出てくるように、生活そのものが社会秩序に合致し、礼儀作法に添うのなければなりません。それでこそ、本校で学んだ価値があるというものです。

ところが中には、学校の名前や卒業証書が、いかにも立派な資格であり価値があるものと思ひ、卒業後もそれらを看板にしている人もあります。しかしそれは、まだ折目が正しく付かないから躰系をつけているのと同じことで、自らの未熟さを周囲の人に明らかにしているのと同じなのです。よく躰けられた服は、躰系をとりはずしても折目が正しくついているように、学校でよく学び教養を身につけた人は、卒業後には先生の指導がなくても、立派に正しく美しい社会生活を営むことができるのです。躰系をとりはずしても、躰系がついていた時と同じような折目正しい服であるように、学校を卒業したあとも家庭や職場において、あたかも学校の校則のもとで先生の指導を受けている時と同じような、礼儀正しく秩序ある、楽しく美しい生活ができてこそ本校を卒業した人といえるのです。本校の卒業生がいるところには、いつも明るく、正しく、仲の良い雰囲気が見れることを強く願うところです。